

# コンゴ伝道に見る異文化接触 [43]

おやさと研究所准教授  
森 洋明 Yomei Mori

アフリカ課長コンゴ巡教の際（1994年10月）に提出されたノソング氏の辞表を受け、翌年1月、その真意を確かめるため、高井猶久世話人とその通訳として私がコンゴに出向いた。数日間にわたる現地での話し合いの結果、彼には会長を辞する思いは一切ないことが確認された。むしろ、辞表を提出したあとの日本人側の対応を試したかったようだった。ノソング氏との話し合いの中で、彼の後継者の話題になると「コンゴの教会長は私しかいない」「どうして本部は私を辞めさせようとするのか」「私以外にコンゴ人の中で誰が会長を勤められるか」と感情的な話し方になった。

確かに関係者の間では、以前からノソング氏には伝道の第一線から引いてもらいたいという考えがあった。その理由は、総合的に見て彼が会長でいると教会活動が十分に進められなかったからである。例えば、彼の言動によって、信者が教会に来られなくなることが多々あった。自身にとって都合の良いように信者を誹謗し、教会から追い出した。本部の決定を覆すため、日本人の旅券を取り上げたり、入国や出国のビザ申請・受領を妨害したりした。また、現地での代表者としての権限で、本部の許可なく政府機関と勝手な約束を交わしたり、「蟻塚騒動」（前号参照）のように祭儀や教義の解釈が自己流だったりした。常駐の日本人が不在の中では、彼のこうした言動が引き起こすかもしれないさまざまな影響が懸念された。

とはいえ、彼のコンゴ伝道における功績も大きい。そもそも、天理教がコンゴ伝道を始めるきっかけとなったのが、二代真柱との出会いであり、彼がいなければコンゴ伝道はなかっただろう。二代真柱が「同志を得た」と思わせるだけの彼の「底なしの親切」は、決して偽装されたものではない。初めてコンゴに行った高井氏が彼の歓待に感激したのも事実である。銃弾の飛び交う中を命をかけて教会を守ったのは、彼の誠真実の姿であろう。どこから彼が変わったのか？ 何が原因なのか？ コンゴ伝道を検証することはそうした意味でも重要である。いずれにせよ、コンゴ伝道における彼の功績を考慮し、「勇退」という形で彼には一線を引いてもらう方向で話は進められた。辞表の真意を確かめるために出向いた高井氏は、ノソング氏にとっては好都合であろうと思われるさまざまな条件を準備していた。例えば、

- ・ 翌年に迫っていた教祖百十年祭を交代時期とし、それまでに後継者となりうるコンゴ人の教化育成をする。
- ・ ノソング氏には将来的にわたって経済的な保障、必要なら新たな家屋も考える。
- ・ 教会の発展、活動の活性化を期して、日本人布教師の派遣も再考する。

などが提案された。特に「コンゴ人の教化教育」や「日本人布教師の派遣」はノソング氏が本部に訴えていた要求でもあった。

しかし、話し合いでは何の進展も、解決も見いだされることはなかった。その「見返り」が何であれ、彼は終始自らの会長職にこだわった。その一方で、当時、ノソング氏の下で教会を支えていた信仰2世代目の人たちの率直な意見は、次代の到来を予感させた。彼らが最も強調したことは、「コンゴ社会やコ

ンゴ人に合わせた布教伝道のあり方」だった。生まれた時からすでに親が信仰しており、その中で育った彼らにとって、天理教は異国の宗教でなく、彼ら自身の生活の一部になっていたのだろう。言い換えるなら、彼らにとって天理教はもはや異文化の宗教ではなかったのかもしれない。だからこそ、コンゴの社会に身を置き、コンゴ人としての文化を持ちつつも、それに呼応しきれていない布教伝道のあり方にもどかしい思いをしたのだろう。「何かを決める時には、一方的に決めないで、現場にいるコンゴ人の意見も聞いてもらいたい」と彼らは訴えた。以降、コンゴ伝道の話し合いの中で、ますます若手の育成、後継者問題がクローズアップされるようになっていった。

そうした中で、後継者育成のためのおぢばでの研修が企画された。ノソング氏と相談の上、彼の3女とその夫、そしてポトポトジュエ布教所長の後継者であった現教会長であるバゼビバカ氏夫婦の4人が、1996年1月より修養科と教会長資格検定講習を受講する



修養科受講の4人

8ヶ月の研修に参加した。この時の修養科と検定講習は、海外部フランス語班の通訳付きで行われ、海外部においても特別の教義研修プログラムが組まれた。また、教会実習や日本文化に関する研修なども行われた。

同年9月14日、ポトポトジュエ布教所長のギンビ・トーマ氏が出直した。父親の出直しの報を受け予定を切り上げてバゼビバカ氏夫妻は帰国した。彼らと同じ便で、高井氏と高橋利行氏が葬儀のために出発、天理教式で葬儀が執行された。教えに感動し、コンゴ伝道の初めからこの道に入り、長年に亘ってコンゴの道の発展に寄与したギンビ・トーマ氏の出直しは、コンゴ伝道の歴史の中で、信仰の第1世代の終わりを告げるとともに、親の歩んだ道に進む第2世代の到来を感じさせた。

8ヶ月の研修を終えた4人は、その後迎えるコンゴ社会の激動期の中で、中心的メンバーとなり、教会の存続に大きく貢献していくことになる。ノソング氏との話し合いではなかなか分かり合えず、彼の進退に関してもはっきりとした結論がでない中で進められた後継者の育成は、信仰の2世代目の到来と重なり、コンゴ伝道に新たな転機となっていくのであった。

そんな矢先、1997年6月、コンゴでは軍事クーデターが勃発、政権の座を巡って内戦へと突入する。コンゴブラザビル教会は若手の台頭で、これまでと違った形に変わろうとしつつも、ノソング氏という大きな「重石」によって、行きつ戻りつしていた。その一方でコンゴ社会は、西洋列国の半ば押しつけのような形で導入せざるを得なかった民主化から、また武力に訴える統治に逆戻りしようとしていた。そこにもコンゴ伝道と同様に「コンゴに合ったやり方」を模索し、試行錯誤を重ね、もがき苦しんでいる姿が感じられる。